
なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

蒼弥

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

【Nコード】

N91920

【作者名】

蒼弥

【あらすじ】

この小説は、数在る「魔法先生ネギま！」の二次創作の一つです。主人公はネギの双子の妹として転生し、ネギのサポートをしていくようです。王道・原作改変・設定捏造を忌諱される方はご遠慮下さい。

注意

作者は「魔法先生ネギま！」の原作をきちんと読んだことがありません。うる覚えの知識や、他の作者様の書かれた二次創作等を参

考にして書いています。ですから、違和感や間違いがあつた等の報告があつたとき、度々修正が入るかと思っています。

また、この小説は不定期更新です。一月に一度更新されれば儲け物、程度であることをご了承下さい。

第一話「あー、ああー、あー！」

人生っていうものは、何が起こるかわからない。どんなに非常識且つ非現実的な出来事だつて起きるときには起きるし、絶対だとされていても簡単に覆される。

僕の場合も、そんな中の一つでしかない。

有り体に言えば、僕は死んだ。

腹が裂け、骨が砕け、内臓が潰れた。我ながら見事なスプラッタが出来上がっていた。感動のあまり思わず吐きそうになったね。まあ、その時には靈魂の状態だったから、吐き出すものなんか無かったんだけど。

それで、しばらくしたら成仏したんだけど……紆余曲折あつて、死後の世界(?)で神様とか名乗る爺さんに転生させてもらえることになった。もちろん前世の記憶付きで。

最初は、胡散臭い爺さんだな、なんて失礼なことも考えてたんだけどね。話してみたら案外面白くつて。なんだか気が合つて、なんだかんだと話をしている内に、そんな流れに。

爺さん曰く「そなたほどの魂をこのまま無かったことにするのは勿体ない。それにそなたは私の友。一度転生し、そなたの霊格を上げてこい」とのこと。もう一度生きられるのは嬉しいし、断る理由も無いので快諾。爺さんも一緒に来ようとしたんだけど、秘書さん

三対六翼の白い翼が背中を生えてる知的美女 が却下して、代わりに生まれたばかりの新米神様を後で僕の所に送るんだって。その新米神様が爺さんに逐次報告する、って事で方針が決定。

そのあとで、何処の世界に転生するか、って話になって。てつきり僕は、元の身体に蘇らせてもらえらると思つていたんだけど、「それだと面白くない」との一言であえなく却下。まあ、その方が楽し

そうだし、いいけどさ。「剣と魔法でファンタジーな世界が良い」と言ったら爺さんが採用。そこまで条件を絞り込んで、それでも星の数ほど候補はあったけど、その中からランダムで転生することに。

「最後に、何か要望は？」

その他諸々の準備を終えると、爺さんが僕に聞いてきた。

「せっかく魔法のある世界に行くんだから、やっぱり使いたいよね、魔法」

「わかった。期待しておれ」

「ありがとう」

「ふむ　時間だ。良き人生を」

大きな期待と、ほんの僅かな不安。今度はあんな死に方したくないなあ、とか思いながら、僕は意識が無くなった。

~~~~~

「……かは、まだ……」

「そう……のはは……」

……ふう。なんとか無事に転生出来たらしい。てっきり胎児の状態からかと思っていたけど、幼児服を着ているようだし、産まれてからしばらく経っているらしい。僕の寝る隣からは、静かな寝息と、

わずかに身じろぎする気配。どうやらほかにも誰か寝ているらしい。そのまましばらくぼうつと考え事をしていると、おそらく夫婦いまの僕から見れば両親　だろっ二人が、僕が起きたことに気づいた様子を見せる。

「おっ、アウロラが起きたみたいぜ。ネギの方は、まだ寝てるみたいだけだな」

「……ふむ」

うん。言葉が全く分らない。よく考えたら、此処って異世界だもんね、言葉が違うのは当然だった。それにしても英語にかなり近いようだけど。

それに加えて視界もはつきりしない。赤ん坊だから視力が発達してないのかな？　そんなぼやけた視界の中で、近くにいた母親らしき女の人が、何か言いながら指をこちらに近づけてきた。とりあえず、不自由ながらもその指を握ってみる。

「あーうやー」

「……ふふっ」

サービスして適当に喋ると、小さくだけど、とても優しく微笑んだ。……多分。母親の隣に居る能天気そうな赤毛の男の人（こっちは父親だろっ）も穏やかな雰囲気だ。隣はぐっすり眠ってる。

幸せそうな家族だ。それだけでも、生まれてきて良かったと思える。

不意に彼女の表情が曇る。

「すまぬ。おぬしらには、きっと辛い道を強いることになるだろっ」

「姫さん……」

「ネギ、アウロラ。」

どうか兄妹で仲良くしてくれ。共に力を合わせ、如何なる困難も乗り越えられるように」

願うように。

祈るように。

僕と、を優しく撫でながら、何とも言えない雰囲気で呟く。

「なあに言っただよ姫さん！ こいつらは俺と姫さんの子供なんだぜ？ そんな心配必要ねえよ」

そうだろう？ とでも言うように、父親がニカツと笑いながら母親に向かって言う。でも、それでも母親の表情は晴れない。……しようにない。

「だが、ナギ……」

「あー、ああー、あー！」

「ほら、アウロラだって言ってるぜ？ 大丈夫だ、ってな」

「……そう、だな。私と我が騎士の子なら、どんな災厄も退けられよう」

「そうそう。それに、スタン爺さんの所なら安心できる。いざとなったら、メルディアナの奴らも、少しは手助けしてもらえんだろうしな」

ふう。無理して大声出した甲斐があったみたいだ。どんな会話だったのかはわからないけれど、この二人が、お互いを信頼している事はわかった。

どうやら僕は期待以上の夫婦のところに生まれらしい。これなら前世みたいな事に成らずに済みそうだ。

と、あれこれを考えている内に、猛烈な眠気に襲われてきた。赤

ちゃんだしね。もうちょっと起きていたいけど、これ以上は無理っ  
ぽい。

まあ、別に良いか。まだまだ機会はあるだろうし。

そんな甘い考えをして      僕は、睡魔に身を委ねた。



第一話「あー、ああー、あー！」（後書き）

と、いうわけで。始まりました、初の二次創作。いや、オリジナルもきちんと書いたこと無いんですけどね。

この小説、アンチ的な要素はあんまり含まれませんけど、キャラ改変とかは普通に行われます。と言うより、きちんと原作読んでないのでキャラをしつかり捉えてない、と言うべきでしょうか。まあ、なんとか成るでしょう！……なると良いなあ。

あ、ちなみに。ストックとかプロットとか、そんな高尚な物は作ってません（キリッ！

だからという訳ではありませんが更新は遅いです。忘れた頃にやってくる。……し、仕方ないじゃないっ！ 受験勉強の息抜きで書いてるんだからっ！

あとあと、感想の批評は、返信まで期間が開くことがあるのでご了承ください。

感想下さい、って事ですよ！ それくらい言われなくても察しなさいよ！……え？ ち、ちがつ！ べ、別にアンタの気持ちを知りたいわけじゃないんだからねっ！？……よし。ツンデレっだから多分明日には二百件くらい感想来てるな。

## 第二話「ぼくだって、家族なんだよ」

光陰矢の如し。ぼくがこの世界に転生<sup>うまれ</sup>してから、三年の月日が流れた。ぼくたちは今、イギリスはウェールズにある村に暮らしている。

……うん。ぼくも驚いた。もといた世界なのかとも思ったけど、ところどころ知らない地名がある。いわゆる『平行世界<sup>パラレルワールド</sup>』というやつなんだろう。地理を一から覚えずに済んで助かった。英語？ 気合いで覚えましたがとも。成長期万歳！

この村は、言ってしまうえば田舎だ。それも半端なものじゃない。ただ、空気は澄んでいるし、独特ののんびりとした雰囲気であちこちで、住民も少ないながら、みんないい人ばかりだ。

さてはて。この三年間で、この世界の事がいろいろわかった。

先ず一つ目。この世界には、秘匿こそされているが、『魔法』が存在している。そして、魔法を扱う事が出来る人を『魔法使い』という。世界中にいる、『精霊』と呼ばれる存在。魔法というのは、その精霊に、『魔力』を代償にして願いを叶えてもらうというもの。まあでも、お伽話とかに出てくる物とは違って、魔法は万能じゃない。難しいことをしようとすれば、それ相応の対価。つまり魔力を必要とするし、人によって得手不得手もある。才能も努力も必要とする、一種の技能ってだけみたい。魔法を知っているいわゆる『裏側』の 人たちでも魔法を使えない人はいるし、魔法を知らない一般人でも強大な魔力を持つ人間はいる。らしい。

ぼくが知っている魔法使い、そのほとんどが『魔法』と言うものを崇高な何かのような物言いをする。だけど、普通に生きてくだけなら、別に魔法が使えなくても支障はないよね。使えるなら便利だと思っけど。……まあ、これも『持つてる人』の言い分なんだろうね。

次いで二つ目。ぼくの家族のこと。

どうやらぼくは双子のうちの一人に生まれたいらしい。つまり、ぼくには双子の兄さんがいる。

名前は『ネギ』。初めて知ったときは、名付けた人のネーミングセンスを疑ったね。ちなみに名字は、ファミリーネーム『スプリングフィールド』。直訳すれば、『春の野原の葱』だ。そんな名前、ぼくなら一生の恥だな。他人事で良かったと心底思う。

だがしかし。そんな印象しかなかった兄さんだけど、なかなかどうしてハイスペックだった。

三歳児にしては頭が良く、すでに言葉がはつきりとしているし、理解力も高い。運動能力もまずまず。そして何より、顔が良い。つまりはイケメン。どういうことだ。

父親譲りの赤毛に、理知的な面差し。従姉妹のネカネさん曰く、「お父さんにそっくり」。そうか、父もイケメンなのか。モテない男子の敵だな。つまりぼくの敵だ。

そんな父だが、名前を『ナギ・スプリングフィールド』といい、なんと《千の呪文の男》サウザンドマスターなどという異名を持つ有名人。十年くらい前に起きた戦争を終焉に導いた英雄で、魔法使いたちの憧れである、マジステル・マギ《立派な魔法使い》の称号を持つ、らしい。へー。

そんな訳で村の大人たちは、『英雄の子供』であるぼくたちに、馬鹿みたいに期待した目で見てくる。……これさえ無かつたらいい人たちなんだけどなあ。当然ぼくはそんなこと知ったこっちゃ無いから、好き勝手やらせてもらってる。三歳児さいこー！

英雄様と結ばれたぼくたちの母親だけど……なんでか誰も教えてくれない。教えられないような人間なのか、はたまた別の理由があるのか。うつすら記憶に残る彼女の印象は、子供思いの素敵な女性、って事くらい。ぶっちゃけその時しか両親の事見てないし、気付いたら二人ともいなくなってたんだから、覚えてろって方が無茶な話、というか話を聞くに、父も母も、ぼくらが生まれてからすぐに死

んだらしい。前世のみならず今世までもがこんな家族環境とか。どうしてこうなった。しかもなぜか兄さんには避けられてる。というか逃げられる。何もしないのに。何もしてないのに！ どうしてこうなった！ …… たった一人の家族なのに。どうやって兄さんと仲良くなるかが目下の悩み。

さてはて。意識的に最後に持って来た訳だけれど……… しょうがない。ぼく自身のこと。

長く伸ばした艶やかな黄金の髪に、白滋のごとき滑らかな白い肌。冬の晴れた空の、透き通った蒼色の瞳。人形のように可愛らしい面立ち。

それはまさに、絶世の美少女。

…… まあ、美人に生まれたのは、素直に嬉しいんだ。前世のぼくは至極平凡な顔だったし、それはもう、一時間ほど鏡の前を動かなかったくらいには嬉しい。正直ちよつとナルシスト入ってる。

しかし。しかし、だ。

なん でお ん な な だ よ ！！

アウロラ・スプリングフィールド。それがぼくの、この世界での名前。ちなみに愛称はローラ。アウロラというのはつまりオーロラのこと、ローマ神話における黎明の女神の名前でもある。兄さんと比べて、なんとまあ大層なお名前。名前負け感が半端無い。

ってか、前世のぼくは男だったんだぜ？ それも女の子との接点なんて中学生までだったし。ボーイッシュってレベルじゃねえぞ。女の子なんて、どうすれば良いんだ。

とは言っても、さすがにもう三年もこの身体で生きているだけあって、少しずつだけ慣れてきた感もある。人間やっぱ慣れだよ慣れ。……うそ。スカートだけはまだ慣れてない。

うん。とりあえず、今の所はそれくらいか。両親のこととか、人たちの過度な期待とか、いろいろとしがらみはあるけれど。まあ、願ってもない第二の人生を手に入れたことだし、<sup>チャンス</sup>ぼちぼちやっていくしかないよね。

……そういえば、爺さんが言ってたサポート役の天使、いつになったら会えるんだろ。

## §

人間の性格というものは、生まれつきのものもあるが、育った環境も大きく影響を与えるものだ。人格形成の基礎となる部分はだいたい乳幼児期に出来上がると言われていて、この頃にどんな教育・経験をしたかによって、どんな人間になるかが決まってくる。もちろん後から逐次修整されていくものだし、人間なんて常に変化していく生き物だ。

それでも、何事も始めは肝心だ。土台がどんなものかによって、上に築き上げるものも様相が変わってくる。土台さえしっかりとして造り上げられているのなら、やり直しとまでは行かなくても、後から補修も修正もやりやすい。

まあつまり、何が言いたいのかというと……。

「……兄さん、何のつもり？」

「……だって」

「もう春だからって、湖に飛び込んだら風邪を引くだけだよ？」

「……」

只今絶賛教育中。

兄さんは何をトチ狂ったのか、自分から湖に飛び込んで、あげく溺れるという謎の行動を起こした。ぼくがたまたま一緒に遊んでいなかった時点で、兄さんを止めることが出来なかった。今は、騒ぎを聞いて駆け付けた村の人に助けられて、家に帰ったところだ。

それにしても、村の人たちは甘い。というか、いったい何を考えてるんだ？ 子供が勝手に湖で遊んでいて、その結果溺れたというのに、きちんと兄さんを叱っていたのはスタンさんという村の老魔法使いだけ。保護者代わりである従姉妹のネカネさんは困ったような顔で窘めるだけだし、村の人たちなんて「元気があっていい」だなんて笑っている始末。これ、一種の育児放棄だよ。……ちよつとだけ、頭にくる。

「……ねえ、兄さん」

「……なに？」

出来るだけ、怒りを表に出さないように。兄さんにもそうだけど、この怒りの大半は、教育を嘗めきつて村の人たちに対するものだから。八つ当たり、いけない。

「兄さんは、どうして湖に飛び込んだの？」

「……………」

さつきとは違って、今度は穏やかに。頭ごなしじゃ、余計に言いづらだろうし。というか言いたくないだろうし。

そのまま兄さんの顔を見て、兄さんが話し出すのを待つ。春になったとはいえ、湖はまだまだ冷たい。兄さんは、それがわかっていて理由も無く飛び込むような馬鹿じゃない……と思う。

「……たすけに、きてくれるとおもったから」

「助けに、って……誰が？」

「……お父さん、が」

「お父さん？」

「僕がピンチになれば……お父さんが、たすけにきてくれるから……」

「……ああ、そっか」

納得、してしまった。兄さんの気持ちが、わかってしまった。

一度だけ、兄さんと二人で聞いたことがあった。みんなが褒め讃える父親と、誰も話したがらない母親。顔しか知らない二人は今、ぼくたちをおいて、何をしているのか、と。ネカネさんは、悲しうに笑って何も答えてくれず、スタンさんはただ一言、「死んだ」とだけ吐き捨てるように言って、寂しそうにお酒を飲んだ。兄さんは『死んだ』ということの意味がわからず、もっと詳しく聞いていて、ネカネさんが「遠くに行ってしまったの」なんてばかりしてた。『死』の概念を教えるのは、本当に難しい。こればかりは、時とともに、自然に悟るしかない。自分で経験して、その意味と恐怖を覚えるしかないから。まだ三歳の兄さんは、まだそれを知らない。だから、自分が危険な目に遭えば、助けてくれると思ってしまったんだろう。父親が、『英雄』だったから。

『英雄』が、助けに来てくれると信じて。だから、そんな馬鹿な真似を。

……気持ちは、よくわかる。ぼくも、そうだったから。

親がいないのは、さみしい。まだまだ甘えたい盛りで、なのに、無条件で甘えることの出来る人がいない。

ネカネさんがいる。村の人たちだってよくしてくれる。

だけどやっぱり、『親』っていうのは、特別な存在だから。特にぼくらの場合、父親が『英雄』だから。

「……あの、さ」

だからといって、今回のことは許せない。

「ぼくだって、家族なんだよ」

もしあの時、近くに人がいなかったら。誰も気付いてくれなかったら。

もしかしたら、兄さんは死んでいたかもしれないから。

「ぼくだって、兄さんの家族なんだよ」

……それに、ぼくという妹がいるのに、家族を求めるなんて屈辱的じゃないか。

何で兄さんがぼくのことを避けるのかは知らない。けれど、ぼくたちは家族なんだ。兄さんはぼくのことをきらっているかもしれない。それでも、ぼくは兄さんと仲良くなりたいと思っているんだ。

「兄さんが求めるなら、ぼくがお父さんの代わりになるから。お母さんにも、お兄さんにも、お祖母さんや弟にだって。兄さんが寂しいなら、ぼくがその分、たくさん家族になるから」

「……………」

だいたい兄さんは欲張りすぎなんだよ。ぼくだけじゃなくて、ネカネさんも、スタンさんも、いつも一緒に遊んでるアーニヤちゃんだって。みんな兄さんを見てくれているのに。こんなにも兄さんは恵まれているのに。

「それに、兄さんだって、ぼくの家族なんだよ。兄さんは、お父さんだけいれば、妹のことはいらなの？」

「……そんなこと、ない」



「だったら、もつとぼくを見て。お父さんもお母さんもないけど、ぼくは、今、ちゃんと兄さんの前にいるから。いつだって、兄さんのそばにいるから」

「……うん。ごめんね、ローラ」

「いいよ。ただ、もうこんなことはしないでね」

「うん。わかった」

につこりと、二人で微笑みあう。

多分こんなのじゃ、兄さんの寂しさは拭えないだろうし、結局な  
んでぼくのことを避けてたのかも聞けないけれど。でもまあ及第点  
は貰っても良いだろうと思う。それに、村の人たちの事もあるから、  
ぼくが兄さんの親代わりもしなきゃだろうし。それならきつと寂し  
くなくなるよね。

そうだ。どうせ教育するなら、完璧な英国紳士でも目指してみよ  
うかな。もちろん頭に『変態』なんて付いてない方の紳士です。兄  
さんイケメンだし、頭も良いし、何より最近暇だったし。紳士的で  
嫌味の無い性格にしまえば、もう完璧じゃないか。モテモテ間  
違い無しだね。リア充爆発しろ。

洗脳？ いいえ、教育です。家族が出来るのなんて初めてなんだ  
から、どうせなら自慢できる人が良いじゃん。誰に迷惑掛けるでも  
ないし。むしろ得するはずだよ。

うん。なんだか楽しくなってきた。

「……ローラ、どうしたの……？」

「うん？ 何が？」

「な、なについて……いきなりになにやわらいだしたから……」

「あれま。顔に出てた？」

「うん。ちよつときもちわるかった」

「………そっか」

すぐ表情に出るところ、直さないと。

でもね、兄さん。その素直なところは美点だけど、世の中には、言っていることと悪いことがあるんだよ。ましてや、ぼくは 不本意ながらも 女の子なんだから、言動には気を配ってね。素直と考え無しは、まったく違うものなんだから。

## 第二話「ばくだって、家族なんだよ」（後書き）

センター試験まで、あと二週間強ッ！

こんにちは。現役受験生です。

第一話から約二ヶ月経過しての二話目投稿という訳ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は最近、受験のストレスからか、独り言が多くなっております。端から見たら完全に危ない人間です。元からですけど。

さて。では本題に。

この小説は、ネギくんを立派な紳士とする物語です。それはもう、ご都合主義的に話が進んで行きます。紳士的な意味で。キャッチフレーズは、『もう“ラッキーすけべ”なんて言わせないっ！これであなたも立派な紳士に！！』みたいな感じで。

アンチ物って、読むのは面白いですけど、個人的には書きたくないものナンバーワンです。だって書いてて嫌な気分になるじゃないですか。というか、ネギくんが馬鹿になりすぎて可哀相。

せめて此処でのネギくんの扱いぐらいはマシにしたい……！！

非才の身ながらも、頑張りますよーっ！

### 第三話「プラクテ ビギ ナル 火よ灯れ！」

四歳ともなると、『自分』というものがしつかりと出来てくる。段々と個性が出てきて、『その人らしさ』が見えるようになってくるのだ。つまり、ぼくの教育が兄さんにどんな影響を与えたのか、目に見える形で表れるようになったわけだ。

とは言え、ぼくは兄さんとほとんどの時間を共にしているために、逆に成長に気が付かないところもある。近すぎて見えないモノというのは、自分が思っているよりも沢山あるからね。些細なことでも見逃したくないのさ、すべては兄さんへの愛故に！<sup>ゆえ</sup>

と、言う訳で。たまたま遊びに来ていたアーニヤちゃんに、兄さんについて聞いてみた。

「ねえねえ、アーニヤちゃん」

「なに、ローラ」

「兄さんの事、どう思う？」

「えっ？ …… ええ！？」

アーニヤちゃんは顔を真っ赤に染めながら、口をぱくぱくと開き、驚いた様子でぼくを見つめてくる。ぼくは砂場をいじる手止めずに話を続ける。

「アーニヤちゃんってさ、よくぼくたちと一緒にいるでしょ。でもさ、普段はこの村にいないじゃん？」

「う、うん。まあ、そうね」

「日本の言葉にね、『男子三日会わざれば刮目して見よ』って言うのがあるんだって」

「どんな意味なの？」

「子どもの成長は早いから、三日も経てば、まるで別人のようです

よ。

ざっくりとだけど、まあ、だいたいこんな感じの意味」

「へー。ローラは物知りよね」

「本をいっぱい読んでるからね。でさ、この言葉の通りなら、ぼくらはすぐに大人になるって事だよな。」

ぼくらはまだ子どもだけど、知らないうちに、毎日どんどん成長していつて……気付いたら、もう大人になってるかもしれない」

「えっと……うーん？」

「ぼくらはすぐに、子どもじゃいられなくなる。大人にはなれなくても、『子どもだから』なんて甘えられなくなってしまう。ぼくと兄さんは、なおさらな。」

なら、せめて今だけは。今この時だけは、ぼくらが子どもであることを許してほしい。

ぼくはね、アーニヤちゃん。最近そう思うんだ」

いつの間にか、ぼくは砂遊びをしていた手を止めて、真正面からアーニヤちゃんを見つめていた。

「むずかしくてよくわかんないけど……けっきょくローラは、なにが言いたいのか？」

「兄さんに関するどんな些細なことも、ぼくは全部把握しておきたい」

「お母さんにきいたんだけどね、ローラ。あなたの大好きな二ホンには、『ブラコン』って言葉があるんだって。きっとあなたみたいな人をさすのね」

アーニヤちゃん、ため息つきながら呆れ顔で言わないでください。ちょっと傷つきます。それにしても、ブラコン呼ばわりは酷くないかなあ。どっちかって言ったら、親馬鹿的な要素の方が強いからね。まあ正味な話、家族だなんて初めてだから、そういうのはよくわか

らないんだけど。つかおばさんは娘に何を教えてんのさ。……この親子は普段どんな会話をしてるんだろう。

「人聞きが悪いなあ。ぼくはただ、兄さんの事を愛しているだけだよ」

「ニホンゴはむずかしいけど、たぶんわたしはまちがってないわ」

「そうかなあ。……まあ、アーニヤちゃんの兄さんに対する『好き』と違うことは、ぼくにもわかるんだけどね」

「えっ!? そっ、それはだって、ローラはネギの家族だからでしょ!?」

「うん。まあ、そうだね。ぼくは兄さんの『家族』だから」

アーニヤちゃん可愛いなあ。顔を真っ赤にして慌てちゃってさ。もう、素直じゃないんだから。

アーニヤちゃんはツンデレだから好きな人に対してキツイ当たりをしちゃうけど、こういうときの反応はとても可愛らしい。さすがにまだ五歳だから、恋愛感情じゃないとは思っけどね。独占欲的なものはあるみたいけど。でも、その照れ隠しの所為で兄さん、アーニヤちゃんに嫌われてると思ってるんだよなあ……。

「ローラ、アーニヤ」

「ねっ、ネギ!?」

「あ、兄さん」

噂をすればなんとやら。離れて絵本を読んでいた兄さんがこっちに歩いてきた。何故かにこにこしながら。アーニヤちゃんは何かわたわたしてるし。

「ぼくもね、ローラとアーニヤのこと、いっぱいだいすきだよ」

……いやあ、恐ろしいね、無垢な子どもというのは。こういうとき、子どもの無垢で純粹なところが、とても眩しく見えてしまう。どこで失くしてしまうんだろうね、この純粹さは。ぼくはもう前世で何処かにおいてきちゃったからなあ。兄さんには、この純粹さをいつまでも忘れてほしくない。

というか、子どもの何気ない一言に感じ入るとか、こりや完全に親の気分だな。両親がいないから、仕方ないっちゃ仕方ないんだけどさ。……ん？ この場合、ぼくは『父親』なの？ それともやっぱり『母親』なのか？ ……いかん。この思考は捨て置こう。行き着く先が恐ろし過ぎる。

いやでも、まさか兄さんに聞かれていたとは。別に隠すつもりは毛頭ないんだけどさ。

「ぼくも、兄さんとアーニヤのこと、いっぱい大好きだよ」

「えへへっ」

「アーニヤちゃんは？ アーニヤちゃんは、ぼくたちのこと好き？」

「わ、わたしも言わなきゃだめなの？」

「だってほら、兄さんもぼくも言っただし」

「ぼくもききたいな」

「うっ」

兄さんのキラキラ上目遣い攻撃が、アーニヤちゃんに猛攻撃を仕掛けてる。アーニヤちゃんの羞恥心との葛藤が見えていて面白い。何度も口を開いて言おうとするんだけど、羞恥心からなかなか言えない様子が、見ていてとても可愛らしい。

「……わ、わたしも二人のことは、えと、その……きつ、嫌いじゃないわよ……？」

首も耳も茹でダコみたいに真っ赤にしつつ、そっぽを向いて、恥

ずかしそうにしながら言うアーニヤちゃん。　そうか、これが前世で言う『萌え』なのか。前世じゃいまいちピンと来なかった感情だけど、今なら十二分に理解できる。しかもアーニヤちゃん自身が美少女（美少女？）だから威力倍増だね。

「アーニヤかわいいっ！」

「兄さん、日本だとういうの、『萌え』って言うらしいよ」

「そうなの？　じゃあアーニヤ、すごいモエだよっ！」

「うっ、うるさいわよネギ！　ローラもネギに変なことおしえないですよっ！」

「アーニヤちゃん萌えーっ！」

「アーニヤモエーっ！」

「はなしをきけー！！」

「アーニヤがおこったー！」

「怒ったアーニヤちゃんも萌えーっ！」

「いいかげんにしろ　　ッ！」

「キヤー！」

「にげるー！」

キヤーキヤー言いながら逃げ出すべくと兄さんと、さつきとは違う意味で顔を真っ赤にしながら追いかけてくるアーニヤちゃん。

こういうのも良いよね。こういうことを繰り返して、子どもは仲良くなると思うんだ。走り回るのは体力を付けるのにちょうど良いし、それに何より楽しい。主にアーニヤちゃん弄りが。

「まちなさいよー！　またないとひあぶりにするわよー！！」

……。　ちよつとからかいすぎちゃったかな。



四歳の春。この日もいつもと変わらず、今まで通りの日常を過ごしていた。

兄さんは目に見えて成長して、生来の気質が教育の賜物か、子どもなりともなかなか立派な紳士っぷりを見せるようになってきていた。最近、村人の一人が語学教師の経験をしていたことを聞いて、兄さんと二人で教えてもらっていた所為か、とても綺麗な言葉を話すようになっていた。変な訛りもなく聞き取りやすく、耳に優しい。もし兄さんが英語の教師になったら、英語の成績は飛躍するね。少なくともヒアリングの能力は鍛えられると思う。身内贔屓を差し引いても、だ。

アーニヤちゃんとは違ふところに住んでるから頻繁には会えないけど、ちよくちよく遊びに来ては三人で遊んでいる。村にも子どもはいるけど、一番仲が良い友だちは、やっぱりアーニヤちゃんかな。とは言っても、村の子どもたちとも結構仲良いけどね。

実はアーニヤちゃん、魔法学校なるところに通ってるらしく、日々魔法使いの勉強に励んでいるとか。リアル魔女っ子だ。魔女っ子アーニヤちゃんだ。……うん、ありだな。

というかばく、実際に魔法を見たことないんだよね。魔法使いの集落に住んでるといふのに、これは一体どういう事なんだ。もっとホグワーツ的な生活を想像してたんだけど……まあ、魔法に頼らなくても普通に暮らせる科学力があるんだから、現実はこのなものか。とは言え諦め切れるはずがないので、今日はアーニヤちゃんに無理を言っ、ネカネさんたちには内緒で貰った魔法の杖（初心者用）を使い、実際に使ってみる事にした。呪文は本で確認済みです。でもさあ、こんな杖で本当に魔法使えるの？ この杖、ぱつと見おも

ちゃんしか見えないんだよね。一言で言えば、ちゃちい。厚紙と棒切れで簡単に作れちゃいそうなんだもん。尖端に星飾りが付いてるのも、それに後押ししてるね。

「じゃあローラ、いくよ？」

「うん。頑張つて、兄さん！」

杖は一本しかないので、順番に使うことにした。まずは兄さんのターン。右手に持った杖を頭上に掲げ、杖の先を見つめながら呪文を叫ぶ。

「プラクテ・ビギ・ナル！ 火よ灯れ！」

兄さんの呪文に応じて、ぼう、と杖の先に火が灯る。それは決して大きな火ではないけれど、まあ所詮は初心者用の魔法だしね。

「ろ、ローラっ！ できたっ、まほうつかえた！」

「すごいね、兄さん。杖の先に火が灯ってるよ」

「これでばくも、まほうつかいだねっ！」

よくは知らないけど、一回で成功させる、っていうのは結構すごいんじゃないかな。魔法の才能あるかもね、兄さん。

まあでも、よくよく考えるとばくらって『英雄の子ども』だしね。魔法の才能も親譲り、ってことか。……納得いかない。

「それじゃ、はい。次はローラのばんだよ」

「ありがとう、兄さん」

「がんばって！」

兄さんから杖を受け取る。こんなおもちゃみたいな杖で魔法を起

こそうなんて、正直半信半疑だったんだけど。実際に兄さんは使えてしまったものだから、これはいいよ馬鹿に出来ない。でもやっぱりこれはちょっと……。

……はあ、文句言ってもしょうがない。とりあえずぼくもやるしかない、か。

「プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ」

「……」

「……」

「……でないね」

「……そうだね。失敗、かな」

使えねえじゃねえか。兄さんは出来たっていうのに、なんでぼくは出来なかつたんだろ。もしかして、魔法の才能ゼロ……？ あ、魔力が欠片も無いとか？

……ん？

「あ、魔力か」

魔法使うのに、魔力のこととか一切忘れてた。そうだね、棒切れ持って何かぶつぶつ言っただけで、魔法が使えるはずが無いよね。うわー、恥ずかしいなあ。

とは言っても、魔法に触れずに何年も生きてきたのに、いきなり自らの魔力を探れだなんて難易度高そうだ。あ、今まで無かったものを探せばいいんだから、逆に易しいのか？ まあ頭で考えてても仕方ないし、とりあえず探してみるしかない、かな。

「んー……？」

目をつむって、意識を身体に向ける。漫画とかなら、心臓とか丹

田とか、あと女の子の場合は子宮の辺りに魔力があるっていうのが、結構メジャーな設定だった気がする。それを考えると……あ、これかな？　なんかそれっぽいのを発見。なら次は、それを動かして……って、なにこれ。全然言うこと聞いてくれない。

しばらくうんうん唸りながら試行錯誤して、どうにか動かす。うわ、何で兄さんはあんなに簡単そうにこなしてんの。これが才能か。ぼくだって英雄の子どもだぞ！　鼻根反対！

こうなったら、この怒りをぶつけてやる。見ていて兄さん。ローラ、輝きます！

「プラクテ　ビギ・ナル　火よ灯れ！」

瞬間、身体を貫く閃光。

「　　うあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！」

あつい。あつい。あつい！　燃えるように熱い。まるで身体の内側から灼熱に侵されているかのような、痛覚を越え、ただ『あつい』という感覚だけが全身を支配する。

そのまま、握っていた杖が右手からこぼれ落ちる。耐え切れずに足の力が抜け、膝をつき、自身を抱くようにしながら倒れこむ。髪が汚れるとか、後で洗濯が大変そうだとか、常のぼくなら思っていない。ただろう事も気にしていられない。

「ローラ！？　　ローラ！！」

誰の声だろう。そんなことすら判断がつかない。あまりに強烈な『あつさ』。身体の中身が全部溶かされてしまったかのような。頭も溶かされてしまったから、だから『あつさ』しかわからなくなっ

ているんだろう。

何かと融け合っていく感覚。『あつさ』はやがて『熱』に変わっていき、いつしか例えようのない快感となつてぼくを襲う。入れ替わっていく感覚は、それでも暴力的に『ぼく』に襲い掛かる。耐えられない。堪えきれない。少しでもその衝動を抑えようと声を張り上げる。壊れないように。壊されないように。

そして、不意に訪れる静寂。

『おかえりなさい。 我らの愛しい娘』

何かが優しくぼくを抱き上げる。なぜかこみあげる懐かしい想いが頬をつたう。さっきまであった苦痛もどこか遠くに感じる。

ああ、そうか……。

暗転。

そうしてぼくは眠りについた。

### 第三話「プラクテ ビギ ナル 火よ灯れ！」（後書き）

お久しぶりです。そして大地震、ご愁傷様です。

我が家のある地域では震度五弱ということでしたが、幸いにも大きな被害は起きず、せいぜいが水道管の破裂程度でした。細かい損害はありましたが。大津波警報は出たものの、結局避難場所に行くことも無く。ずいぶんとマシな状況だったのではないかと思っています。

知り合いの無事も全員確認でき、ホッと一安心したところで約二ヶ月強振りの更新です。

大学受験が終わりました。無謀にも国公立大学を志望した結果の惨敗。面接でやらかしましたよ、ははっ。センター試験でも打ちのめされましたけどね。

それはさておき本文。実は悪魔襲撃まで終わらせなかったのですが、思ったより量が膨らみ、急遽次話に持ち越すことに。ただ今執筆中でありんす。でも原作を詳しく呼んでないから詳細がわからないの。教えてエロい人。今話は二ヶ月掛けてチマチマと書いた物を、とりあえず繋げているだけなので、いつか修整するかもです。

いろいろとあったので今回の後書きは普通にやりました。それではまた次回！ しーゆーあげいん！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9192o/>

---

なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

2011年11月17日20時17分発行